



法学者の本棚 原点に立ち返るために 阿川尚之
『アメリカン・ロイヤーの誕生：ジョージタウン・
ロー・スクール留学記』

島並, 良

(Citation)

法学セミナー, 720:扉-扉

(Issue Date)

2015-01

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002666>

※ この論文ファイルは印刷不可です。



法学セミナー2015/01

法学者の本棚



阿川尚之

アメリカン・ロイヤーの誕生

——ジョージタウン・ロー・スクール留学記

中央公論新社

1986年／新書判／232頁

原点に立ち返るために

神戸大学教授・フォーダム大学客員研究員

島並良(知的財産法)

米国のロースクール (LS) では、「考える」ための授業が教授と学生の対話形式で展開されているらしい——高校生の私が軽いショックを受けた本書は、元国際弁護士で現在は米国憲法史の専門家、そして父・阿川弘之氏と同じ親米派論客として知られる著者が、米国の名門LSに学んだ記録である。企業派遣での留学を思い立った頃から、日本人としては異例の3年間に亘るJDプログラム (米国で法曹となるための本課程) や法律事務所研修を経て、NY州司法試験に合格するまでの体験が、一留学生の見た米国ロイヤー社会の断面とともに瑞々しい筆致で綴られている。

亡父のほか法学部卒の知己が一人もいない「情報弱者」だった私が法学部受験を決めた理由は、父の歩んだ道への淡い関心と、国語の授業で勧められた本書との出会いにあった。その後、駆け出しの研究者として米国に1年間滞在したのも、本書の影響を抜きには語れない。それから20年が経ち、私は今また米国のLSで客員研究員として過ごしなが、誕生前のアメリカン・ロイヤーの卵たちと机を並べている。そして、本書に描かれた教育の質を高める工夫や、それを受けた学生の猛勉強ぶりが、ある時代・大学に特有の例外ではないことを日々実感している。日本の法曹の卵たちが将来、国際訴訟や通商交渉といった舞台上で闘うライバルは、LSでのサバイバルを通じて「競争に勝つこと、勝つためにすべての努力を注ぐこと」(本書75頁)を叩き込まれるのだ。

日本の法科大学院制度は、ご存じのとおり米国のLSを参考にして創設された。発足後10年を経て、今一度<制度の原点>に立ち返る際に、その手がかりとしての本書の魅力は今もなお色褪せない。リーマンショック後は特に、入学志望者の減少や修了生の就職難が米国LSでも問題となっているが、今でも多くの州ではLS教育をバイパスする途はないし、LSでの教育と成績こそが就職では重視され続けている。社会が教育内容そのものに高い関心を寄せ、教師による学生評価を信頼するならば、いきおいLSの授業は真剣勝負の場とならざるを得ない。

そうした真剣勝負の伝統は、映画『ペーパー・チェイス』(1974年)、スコット・タロー『ハーヴァード・ロー・スクール』(早川書房、1985年)、ダグラス・K・フリーマン『リーガル・エリートたちの挑戦——コロンビア・ロースクールに学んで』(商事法務、2003年)等にも描かれている。法科大学院生としての毎日に倦んだら、これらから刺激を受けるのも一つの手である。そしてもし興味を覚えたなら、将来、阿川青年のように外国に飛び出して法を学ぶのはどうだろう。日本法の勉強で手一杯の間はまだピンと来ないかも知れない。しかし、異国の地で法の自明性を問い続ける経験は、日本社会や、さらには自分自身のあり方をも相対化してくれるに違いない。本書は法学部をめざし、そして海外に憧れた<私の原点>に立ち返るために、私自身が時おり手に取る作品でもある。